

所見からは *Aspergillus* は二次的感染と考えられた。

第2例は、悪寒、高熱をもって発病、胸部レントゲン写真上、ニボーを有する透亮像を認めた典型的肺膿瘍の症例で、化学療法により良好な経過をとったが、レ線上透亮が消失し瘢痕を

残すまでに約6ヶ月を要した。

第3例は、肺結核の治療中、他の肺野に腫瘍状の陰影を生じ、悪性腫瘍に対する検査の成績はすべて陰性であったが、増大する傾向を認めたことと年齢とより、肺癌を疑って切除した症例である。切除組織所見は肺膿瘍であった。

d. 慢性肺炎の病理組織像

(京都大学結核胸部疾患研究所 病理部) 森 川 茂

いわゆる非特異性慢性肺炎の病理組織像に就いて、1965—1967年の京大医学部病理学教室剖検例及び1966—1967年同病理組織検査室のフローベ標本により検索した。慢性に経過する肺の炎症として、結核その他の特殊性炎を除くと、1) 小葉性肺炎の化膿性変化あるいは肉芽性変化、2) 大葉性肺炎の異常経過として肺膿瘍、肺壊疽・肉様変、3) 原発性の肺壊疽・肺膿瘍、4) 肺真菌症、5) 慢性間質性肺炎、更に特異的なものとして1例の、6) 原発性の結節性肉芽形成をみる肺炎像をみた。

慢性小葉性肺炎の肉芽型には肺胞構造の破壊されたびまん性の肉芽形成と肺胞構造は保たれ間質や肺胞腔内へ肉芽組織の突出がみられる型

と2型あり、前者はしばしば microabscess を合併していた。慢性間質性肺炎の病理組織像はやはり肺胞隔壁がよく残り繊維化した肉芽組織が隔壁に増生し、粗い格子状の印象を与える。一部肺胞内には剝離した上皮や遊出した白血球、赤血球をみた。異常 γ -グロブリン血症の一例に原発性と思われを肺の肉芽性炎をみた。この肉芽組織は間質及び肺胞内にもみられ、リンパ球、形質細胞、好酸球の他種々の形の巨細胞も認められた。螢光抗体法により、円形単核細胞や巨細胞胞体内に γ -グロブリンを証明した。最後に瘢痕癌とその類似の所見について討論した。

4 心臓外科の現況と問題点

(三重県立大学医学部 胸部外科) 久 保 克 行

心臓外科の現況については、長石教授門下生が赴任している諸施設において行なわれた心臓手術の症例について述べた。昭和42年9月までに行なわれた症例数は1183例で先天性心疾患802例、後天性心疾患381例である。

そのうち、低体温法または人工心肺による直視下心臓内手術は先天性心疾患586例、後天性心疾患62例である。

これらの手術成績をみると、手術成績の悪い疾患は、大約次の数種の疾患に集中している。すなわち、肺高血圧症を伴った心室中隔欠損症、フアロー氏四徴症、心内膜床欠損症、および乳幼児心疾患などである。そこでまず、これ

らの疾患に対する外科治療に関して検討を加えた。

また、血流遮断の方法に関しての問題点として人工心肺の簡易化、および拍動型人工心の開発の二点について述べた。

人工心肺の簡易化についての要点は、その清掃、消毒などの準備や後仕末が簡単であること、および多量のヘパリン血を準備しなくて実施しうることの二点である。そのために、人工肺および回路セットをすべて disposable となし、症例毎に新しい既に消毒された人工肺および回路セットを用いれば、その準備は約10分間で完了し、しかも使用後に放棄すればよいの